

## イメージの国のアリス：写真、絵画、「少女」崇拝

杉村 使乃

Charles Lutwidge Dodgson (1832-1898) が Lewis Carroll の名で<sup>(1)</sup>、*Alice's Adventures in Wonderland* (以下『不思議の国のアリス』) を出版したのは1864年のことであった。「ナンセンス」やリズムカルな文章や地口 (pun) の面白さもさることながら、原作を読んでいなくとも、長い髪にヘアバンド、白いエプロンドレスのアリス、ジェントルマンよろしく盛装したウサギ、きのこの上で水煙草をくゆらすいもむし、きちがい帽子屋、笑い猫など、視覚的に印象深いキャラクターの一人や二人を目にしたことがある人は多いのではないだろうか<sup>(2)</sup>。数学者ドジスンが生きた厳格なヴィクトリア朝の価値観を一見、笑い飛ばすような、そして「進歩」のないこの物語は、往々にして「サブカルチャー」、「ポップカルチャー」の分野でとりあげられ、新しい「アリス」が増殖し続けている<sup>(3)</sup>。

この物語の持つ視覚に訴えるおもしろさが、現代にもこの物語を生きながらえさせている要因の一つと考えられる。しかしながらこうした「視覚」への興味は、作者キャロル自身、そして多くのヴィクトリア朝人が共有するものであった。『不思議の国のアリス』の冒頭を見てみよう。

Alice was beginning to get very tired of sitting by her sister on the bank and of having nothing to do: once or twice she had peeped into the book her sister was reading, but it had no pictures or conversations in it, "and what is the use of a book," thought Alice, "without pictures or conversations?" (Chapter I, 7)<sup>(4)</sup>

姉が読む挿絵のない、または人物たちの会話のない絵本に幼いアリスは大いに不満を抱く。こうした視覚的な魅力の重要性はキャロルも十分理解していたようである。大英帝国を担うジェントルマン、家庭を守る天使としての女性が称揚され、厳格な社会規範がしかれていた19世紀のヴィクトリア朝 (在位1837-1901) は、一方では大英帝国の各地から様々な産物が集まり、視覚的なエンターテイメントにあふれていた時代でもあった。多くの人々が演劇や絵画、博物館見学を楽しみ、家庭には"picture book"や「写真」を飾る習慣が見られた。

教区牧師であり教育者である父を持ち、自分自身も伝統あるオックスフォードのChrist Church Collegeで特別研究員 (Fellow) として、そして後には数学と論理学の講師として勤務したヴィクトリア朝人ドジソンとしては、自分が負うべき義務と視覚的な快樂への興味の間でジレンマを感じていたようである (Carpenter 100)。しかしルイス・キャロルになることで単なる視覚芸術の消費者から表現者へと変身を遂げた。『不思議の国のアリス』はキャロルの視覚芸術への興味がふんだんに表れている作品である。というよりもキャロルが生きた時代における視覚芸術への興味が表れている作品と言えるかもしれない。視覚芸術の中でもここでは特にキャロルが強い関心を持っていた「写真」と、絵画の世界で大きな流れを作った「ラファエル前派運動」(Pre-Raphaelites Movements) を取り上げる。そしてこの二つに共通する「少女」崇拜の傾向と、「少女」たちがルイス・キャロルの作品にどのような影響を与えたのかを考察していく。もはや『不思議の国のアリス』は一人の作家の手による自立した一つの作品ではなく、挿絵、出版と消費の傾向、ヴィクトリア朝におけるさまざまな文化事象を含んだ「総合体」であり、かつこれからもより広いネットワークを広げる可能性のある作品であることがわかるだろう。

## 1. 「アリス」とモデル

『不思議の国のアリス』には、明確なモデルがいるということは広く知られている。冒頭に表れる "All in the Golden Afternoon..." で始まる巻頭詩は、この物語の起源を読者に伝えてくれる。1861年7月4日、キャロルは友人のRobinson Duckworthと、クライスト・チャーチ・コレッジの学生監 (Dean) であるHenry George Liddellの三人娘、Lorina (13歳)、Alice (10歳)、Edith (8歳) とアイシス川へボート漕ぎにでかけた。『アリス』はこの少女たちにせがまれて即興で語った物語が元になっている。アリスはもちろん、他の娘たちも姿を変えて物語の中に登場する。この少女たちは、芸術家ルイス・キャロルにとってのMuseとなったわけである。

後にこの物語は、1862年キャロルの手によって挿絵をほどこされ、*Alice's Adventures Under Ground* というタイトルで翌年アリス・リデルへのクリスマス・プレゼントとして手渡される<sup>6)</sup>。この作者とモデルの関係とその後の断絶は多くの批評家の興味を引くところとなり、アリス・リデルに関しても伝記が出ているほどである (Carpenter 91)。1864年、すでに児童文学作家としての名を確立していたGeorge McDonald (1824-1905) に勧められ、11月に*Alice's Adventures in Wonderland* として出版される。

その後、ドジソンとして専門分野の論理学に関するエッセイなどを精力的に雑誌に掲載、出版する。また『不思議の国のアリス』とその続編の成功によって作者は、親戚縁者を支援し、休暇を楽しむ資金を手に入れた。しかしながらこの頃リデル家とのつきあいはすでに終わっていた。三人姉妹の母親であるリデル夫人はドジソンが姉妹たちとつきあい、趣

味の写真のモデルとして彼女たちを撮影することにそれまで反対していなかった。しかし長女が14歳になる頃には、娘たちの結婚相手としてふさわしいとは考えられない一介の大学教師が足繁く家を訪れることをよしとはしなかったようだ (Clerc 110)。

意外にも『不思議の国のアリス』の挿絵はアリス・リデルには似ていない。非常に印象的な「アリス」の挿絵のモデルはキャロルの撮影した写真の中に表れるMary Hilton Badcockである。金髪にヘアバンド、膨らんだスカートと多くの読者が「アリス」に抱くイメージはそこからきたようである<sup>(6)</sup>。初稿に自ら挿絵を施したキャロルは、自分の持つ「アリス」と挿絵のイメージとの食い違いに不満を抱いたようだが、多くの批評家と読者が認めるようにJohn Tenniel (1820-1914) の描いた挿絵ほど、文章と同等な力を持ったものは他にはみられないだろう。テニエルは1850年から風刺雑誌Punch (1841-) のスタッフとなり、1864年から1901年に引退するまで政治風刺画のチーフとして活動した。キャロル自身も『パンチ』を定期購読しており、その風刺画から人物の戯画化や動物の擬人化について多くを学んだと思われる。テニエルや彼の同僚たちが『パンチ』に掲載した絵が、『不思議の国』の予告編という役割を果たし、さらにテニエルが『パンチ』の主任風刺画家として成功を収めるにつれ、彼の作品であれば何千という中産階級の読者の賞賛を集めることが確実に became (Hancher 82-3)。

キャロルとテニエルが描いた『不思議の国のアリス』の奇妙な世界に、意外にもヴィクトリア朝の読者は親近感を抱いたのではないかと思われる。巷では博物学がファッションとしてもてはやされ<sup>(7)</sup>、イギリス国内の小動物や植物が中産階級の居間に集められた。また帝国の各地からも珍しい産物が集められ、博物館に収集されていた。イギリスに生息していなかったドードーも、フラミンゴもイギリス国民にはなじみのキャラクターであったろう。また「写真」を通してロンドンの路地裏やイギリスが支配した土地からの情報がイメージとして流入していた時期とも重なっている。中産階級にとっての「他者」—外国人、下層階級、そして犯罪者—は、自らの「内部」(domestic) のネガティブな部分を戯画化するイメージとして使われるようになる (Armstrong 213-217)。さまざまなイメージが氾濫する大英帝国でこそ、キャロルやテニエルの戯画の手法は発達したと言えるであろう。

## 2. ヴィクトリア朝の「写真」熱と写真家としてのキャロル

新しいイメージをイギリスにもたらす上で「写真」というメディアは大きく貢献した。1839年にSir John HerschelがRoyal Societyにて、"photography"についてのペーパーを発表し、これがイギリスにおける「写真」についての最初の言及となる。1851年に華々しく開催された第1回万国博覧会は、拡張を続ける大英帝国の威力を誇示していた。そこでも写真は重要な見世物の一つであった (Taylor 7)。1857年には、ロンドンの店と

いう店、中産階級の居間のマントルピースに「写真」が飾られることになる。古くからの貴族が、広大な領地や系統図を所有し、豪華な屋敷に「肖像画」を飾るように、家族の「写真」は台頭する中産階級が自らの歴史とアイデンティティを保証する手段となったのである。

1854年に「特別研究生」(Fellow)から講師(Lecturer)となりクライスト・チャーチ・コレッジの正規の教授スタッフとなったドジスは、趣味として写真を楽しめる収入を得るにいたった(Taylor 15)。周辺には写真を楽しむ友人たちもいた<sup>(8)</sup>。キャロルが「写真」にのめりこんだわけとしては、もともと彼が劇やパントマイム、美術など、視覚芸術への興味を持っていたことがあげられるであろう。絵画にも興味を持ち、自分を"artist"として認識していたらしく、実際に『アリス』の初稿は自ら挿絵を試みているが、プロの作品として評価できるとはいいがたいであろう。しかし写真は、キャロルが絵画的な表現をすることを可能にし、また彼はさまざまな機材や薬品を巧みに扱う化学的な手腕を披露することができたのだ(Taylor 11)。

「写真術」をテーマにキャロルはいくつかの作品を残している。その一つの"Photography Extraordinary"(1855)は、そこに見られる「写真術」の隠喩において、キャロルの作品の特徴を示唆しているように思われる。この作品に描かれる「新案写真機」は、「最も愚鈍なる頭脳に宿った志向といえども、しかるべく加工された印画紙にひとたび感受されたならば、これを任意の強度に現像("develop")することができる。」<sup>(9)</sup>そこで実験台となった男性は催眠術をかけられ、彼の頭脳に浮かんだ思考がまるで小説のように印画紙に表れる。しかも焼き付ける強度によって文体が変わっていく。「見えないもの」を視覚化することに熱中していたヴィクトリア朝で、人間の皮膚の下にあるものを写す初めてのレントゲン撮影が行われたのが1885年であった(富山 110)。これに先立って、キャロルはフィクションの中で、目には見えないはずの人の「心」を「写真」で視覚化してみせたのである。『不思議の国のアリス』に表れる"You are old, Father William" (37-40)などの戯れ歌は、全て当時の親しまれていた歌を、キャロルがパロディにしたものである。元となった歌の多くが道徳的な内容を持っていた<sup>(10)</sup>。元にあったものを"develop"する過程、また"positive"と"negative"の関係など「写真術」のプロセスは、キャロルの創作過程の隠喩となりうるのではないだろうか。

ポートレートで腕前を発揮した彼は<sup>(11)</sup>「写真撮影」という口実でAlfred Tennyson、John Ruskinなどの文学者、またDante Gabriel Rossetti、William Holman Hunt、そしてThomas Woolnerなどキャロルが傾倒したラファエル前派の画家に近づくことができた。吃りがあり、必ずしも社交的でなかったキャロルだが、「写真家」として"observer"のポジションで有名人たちと付き合いをすることができたのである(Carpenter 104)。

1858年から1862年は、キャロルが特に精力的に写真撮影に取り組んでいた時期で、ア

リス・リデルの写真も何枚か残している。後に、Hargreaves夫人となったアリスは80歳になってからキャロルと過ごした日々について語る。「私たちは家庭教師に連れられて彼のアパートに行ったものでした。アパートに着くと私たちは大きなソファに彼をぐるっと囲んで座り、彼が時々鉛筆やインクで絵を描きながら物語ってくれるいろいろなお話を聞いたものです。私たちが本当に幸せな気持ちでいると、彼は私たちにポーズをとらせて、陽気な一時が過ぎてしまわないうちに写真に撮るのでした。」(Clerc 104) アリスは時折、暗室にも入らせてもらったようで、自分の姿が現れ出るのを見る時の興奮を、懐かしく思い出している。当時の写真は、一枚を撮るために多くの時間と手間を要したので、子どもたちのかわいらしい姿を上手く撮影するのは至難の業であつたらしい。

キャロルは、アリスの他にもかわいらしい少女を見つけると積極的に接近を試みた。海水浴場で休暇を過ごしたときのキャロルの日記には、知り合った少女たちの名前が記されている。彼は「写真を撮る」という名目で少女たちに近づき、可能ならば彼女たちにキスをしてよいという許可を、そして裸体の写真を撮る許可を母親たちに求めた(Wullschläger 21)<sup>(12)</sup>。自分がかの有名な『不思議の国のアリス』の作者であるということ公の場で指摘されることを忌み嫌ったが<sup>(13)</sup>、このときばかりは、少女との交際を正当化するために、母親たちに『不思議の国のアリス』を送ることも忘れはしなかった。少女への性犯罪が問題となっている現在では考えにくいことだが、多くの母親たちはキャロルの願いを喜んで聞き入れたのである(Wullschläger 23)。そしてクライスト・チャーチのこの無口で気難しい数学教師の部屋の一角には、いつも少女たちを楽しませる絵本やパズル、おもちゃが用意されていた。1928年、キャロルの死後、彼の"child-friends"は、キャロルが愛情溢れた美しい性質を持っていたと振り返っている。

### 3. ルイス・キャロルと「少女」崇拜

現代の私たちは、キャロルを19世紀に現れた"Humbert Humbert"<sup>(14)</sup>とみなしたくなる欲求に駆られる(Wullschläger 21)。しかしながら、19世紀における「子ども」、特に「少女」が文化の中でどのように表象されていたかを知ると、キャロルが少女たちとのつきあいを恥ずべきものとは思わなかった理由、そして母親たちが彼の要求を容易に受け入れた理由が見えてくる。

ルイス・キャロルの作品がヒットしたヴィクトリア朝は、「子ども」という時代が認知され、「子ども」向けの市場が誕生した時期と重なっている(Wullschläger 14)<sup>(15)</sup>。こうした状況がアリスやその続編、またそれに付随する商品のヒットにつながったのである。また「子ども」は「写真」の重要なテーマとなった(Robson 132-3)。ヴィクトリア朝の芸術家は、ロマン派から継承した自然と「子ども」のつながりを強調し、さらに感傷的で道徳的なものとして作品の中へ取り入れた。大人の男性を精神的に支える「子ども」像が文学に現れ、

特に未性的な「少女」は性的純潔のイメージとして理想化の対象となった (Wullschläger 19)。大人の女性におけるセクシュアリティが強く否定されたので、多くの紳士たちは、性的充足への欲望達成とは「無関係」であるとされた「少女」を崇拜し、自らの貞操観を脅かされることなく、夢に耽ることができた (Wullschläger 23)。キャロルもこうした「少女」崇拜者の一人で、キャロルは友人の少女Enidの母親に、「少女」の"sweetness and innocence"に触れることは自分の精神に聖書と同じくらい良い影響を与えると60歳のとき手紙で伝えている<sup>(16)</sup>。キャロルは少女たちとの楽しい逢瀬をキャロルは極めて"healthy"なこととしてとらえ (Wullschläger 40)、大人より純粋な魂を持ち、より神の近くに位置している少女たちと交わることは自分の魂にとっても大変いいことだと考えていた。誕生の根源のすぐそばに存在する「子ども」は大人より霊的な力に優れているという概念はロマン派の影響を継承したものだだった (Carpenter 23)。

キャロルの「少女」崇拜と作品に現れる「少女」像に影響を与えたものとして、彼のラファエル前派 (Pre-Raphaelite Brotherhood) への傾倒もあげられるであろう。ラファエル前派と名づけられた芸術運動は聖母子像で有名なイタリアのルネサンスにおける画家 Sanzio Raffaello (1483-1520) 以前の芸術様式を必ずしも志向していたわけではない。むしろその大きな志は凡庸な風俗画への反乱と形骸化したアカデミーの規範に反対することであり、ラスキン言うところの「自然に忠実たれ」(『近代画家論』I 1843) をモットーとしていた<sup>(17)</sup>。ロイヤル・アカデミーの美術展で、キャロルはJohn Everette Millaisの絵に感動し、彼らラファエル前派の絵画に興味を示し、「写真家」として彼らに近づいたことは前述の通りである。

ラファエル前派の芸術における「女性」たちとキャロルの「少女」たちにはいくつかの類似が見られる。『アリス』の初稿に挿絵を入れる前にキャロルはダンテ・ゲイブリエル・ロセッティを訪問しており (1862-64)、キャロルの手による長い髪を波打たせた「アリス」は、アリス・リデルというよりもラファエル前派の画家たちの描く女性像に近い (Stern 172-3、図版 1 参照)。興味深いのは作品の類似性というよりも、作品における女性モデルの役割における共通点であろう。ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティの妹であり同じく芸術家である Christina Rossettiが "In an Artist's Studio" (1856) で、彼女の兄と思われる芸術家とモデルの関係についての詩を書いている。芸術家のキャンヴァスに描かれる女性は、彼女自身というよりも「ありのままではなく、彼



図版 1

の夢を満たすものとしての彼女の姿」("Not as she is, but as she fills his dream.") である (Alexander 818-9)。つまり女性は男性芸術家のインスピレーションを刺激するMuseであり、男性芸術家が彼らの中に見出す「女性的なるもの」を投影させる媒体にすぎない。自分のイメージを先行させたい男性芸術家にとって、「無垢」ゆえに「愚か」とされる「女性」や「少女」は、作家の感情的・心理的な欲求を反映する白いキャンヴァスのような存在になりえたのである (Stern 174)。

このような女性観は、前述した「子ども」観と同様、ロマン派的な要素である。ラファエル前派にとっての「女性」、そしてキャロルにとっての「少女」たちは、「清純」、「無垢」であり「自然」に近い存在であるがゆえに、「墮落」の危険にさらされる存在でもある。キャロルの撮影した作品の中でも一際印象深い物乞いに扮するアリス・リデルの写真、"Alice Liddell in Beggar"は、キャロルの「少女」観が投影された作品の一つであるといえるであろう (図版 2 参照)。Charles DickensやHenry Mayhewの著作物に表れる1840年代の社会不安とイギリスの都市における貧民階級の恐るべき状態は、「子ども」のイメージに広がりを与えた。スラム街におけるぼろ服の子どもたちの哀れなあどけなさは、写真を通して多くの人々の目をひいた。このような「墮落」の危険にさらされている「無垢」な魂の表象は、この時代の「子ども」観に一致するものであった (Carpenter 18)。キャロルの撮影した写真から絵画におこし彩色された作品がいくつ



図版 2



図版 3



図版 4

かある。裸で長い髪を波打させたBeatrice Hatchの背後には、写真にはない海岸が広がっている (図版 3 参照)。また同じく裸の少女が架空の川辺にぽっかりと目をあげて座っている絵もある (図版 4)。こうしたキャロルの写真から生まれた絵画に見られる自然と

「少女」の近似性を強調する演出は、ラファエル前派の影響が見られると言えるであろう。

## 結 論

さまざまなイメージが氾濫したヴィクトリア朝時代のイギリスはキャロルが"Wonderland"を描くことを可能にした。この架空の空間は、後に続くファンタジーに現れる"Wonderland"のさきがけとなった。キャロルの"Wonderland"へでかけることができるのは「子ども」、「少女」でしかなかった。Catherine Robsonが指摘するように、キャロルは姉妹たちに愛されて、多くのゲームや物語を楽しんだ「子ども」時代を人生で最も美しい時期としてとらえていただろう (138)。しかし数学者・論理学者ドジスンが再びその"girlish"な「子ども」時代に入りこむためには、「アリス」という「少女」が必要であった (Robson 137)。あたかもラファエル前派の画家たちが自分たち個人の中に実は存在している「女性的な」部分を表象するために、女性モデルを必要としたように。

ラファエル前派の芸術家は現実の結婚においても、自分たちのモデルであった「無垢」で「墮落」の危険のある女性を「改善」し、その報酬として彼女たちの「献身」を求めることを試みた—そして多くの場合、失敗に終わった—。これに反して、キャロルは「イメージ」と結婚するという夢は持たず、むしろアリス・リデルに関しても夢の「少女」であることだけを求めたと思われる。しかしながらアリス・リデルが去った後も、キャロルの描いた「アリス」は有名人となった彼に次なる「アリス」と出会うチャンスを再生産していった。そんな「おともだち」の一人にキャロルは手紙で "Don't grow a bit older... if anything, you'd better grow a little younger."<sup>(18)</sup> と告げる。彼のこの少女に対する「もう大きくならないで」という懇願は"Wonderland"でアリスが小さくなったり、大きくなったりする逸話を彷彿とさせる。「冒険」を続けるためには、「肉体」をコントロールしなければならない。このことは『不思議の国のアリス』において重要な問題であると考えられる。キャロルが描く"Wonderland"に入り込むためにアリスは「少女」のままでいなければならない。さもなければ彼女の姉のように分別くさい本を読み、妹の冒険の話に耳をかたむけ、"Wonderland"のかすかなざわめきを感じるだけで満足しなければならないであろう (98-99)。現実世界こそが威圧的な男性やヒステリックな女性、そして戯画化されたキャラクターであふれる"Wonderland"だと気づいたとき、キャロルは自分の中に、小さな「少女」を見出したのだらう。

## 註

- (1) Lewis CarrollはCharles Lutwidgeのラテン名Carolus Ludovicus (Latin) を入れ替えて作ったと言われている。
- (2) 1951年のWalt Disney(1901-66)のアニメーションを待つまでもなく、多くの芸術家や画家が『不



思議の国のアリス』にインスピレーションを得た作品を残している。（「アリス」に見せられた画家たち」笠井 pp.80-96）

- (3) カウンターカルチャーにおける「アリス」の変容は佐藤を参照。
- (4) *Alice's Adventures in Wonderland*のテキストのページはNorton版による。
- (5) Hargreaves夫人となったアリス・リデルは財政的理由から、1928年、この草稿を売りに出す。これにはそれまでイギリスで一冊の本につけられた最高の価格、1万5千4百ポンドという値がつけられた (Clerc 112)。
- (6) Mary Hilton Badcockについては1860年にキャロルが撮影した写真を参照。(Wullschläger Chapter 2. 図版)
- (7) ヴィクトリア朝における「博物学」の隆盛については、Lynn Barberを参照。
- (8) 「写真同好会」(Photographic Exchange Club)のメンバーである叔父Robert Skeffington Lutwidgeと彼の同僚Hugh Welch Diamond。同じコレッジの友人のReginald Southeyは後に写真家として名を残すJulia Margaret Cameronとの交流があった(Taylor 13)。
- (9) "Photography Extraordinary"(1855 Rpt. in Gernsheim.)における"development"。訳は高橋康成による。

<p>第一段階</p> <p>Alas! she would not hear my prayer! Yet it were rash to tear my hair; Disfigured, I should be less fair. She was unwise, I may say blind; Once she was lovingly inclined; Some circumstance has changed her mind.</p>	<p>やんぬるかな！かのひとに いれられざりし わがねがひ さればとて かみかきむしるも おろかしけれ みだるれば わがおとこまえ さらにおちむ かのひとは みるめもたざる しれものよ あるときは われになびかむ ふぜいなりしを わけありて ころろかはりし つれなさよ</p>
<p>第二段階</p> <p>Well! so my offer was no go! She might do worse, I told her so; She was a fool to answer "No". However, things are as they stood; Nor would I have her if I could, For there are plenty more as good.</p>	<p>「やれやれ みごとにふられたか ちくしょう どっかのあほうを つかむがいいや 「いや」とは あぎれた のうたりんおんな ともあれ よって くだんのごとし ものにできても こちらで ごめん どうせ おんなにゃあ ことかかぬ」</p>
<p>第三段階</p> <p>Firebrands and Daggers! hope hath fled! To atoms dash the doubly dead! My brain is fire—my heart is lead! Her soul is flint, and what am I? Scorch'd by her fierce, relentless eye, Nothingness is my destiny!</p>	<p>おお 松明よ 探検よ！ 去りにし希望よ！ 木端微塵に打ち砕けよ！ 二重に死せる者よ！ わが脳髄は焰 わが心は鉛なり！ かの姫の心は火打石 してわれは何者ぞ？ 獐猛にして仮借なき姫の眼差しに灼かれ わが定めはひたすら無なるか！</p>

(10) Robert Southey(1774-1843)の"The Old Man's Comforts and How He Gained Them" (上)とキャロルのパロディ (下) の一部。(Gardner 69)

<p>"You are old, father William," the young man cried "The few locks which are left you are grey: You are hale, father William, a hearty old man; Now tell me the reason, I pray." "In the days of my youth," father William replied, "I remember'd that youth would fly fast, And abus'd not my health and my vigour at first, That I never might need them at last."</p>	<p>「もうし ウイリアム神父さま」 若い男の申しける 「残んの髪におく霜の白さあざむくその元気 あかし給え その秘訣」 ウィリアム神父の答えていわく 「われ若き日より青春ははやての如く去るものと むだなついえをつつしみて たくわえたれば 心静けし」</p>
--	---

↓

<p>You are old, father William," the young man said, "And your hair has become very white: And yet you incessantly stand on your head-- Do you think, at your age, it is right?" "In my youth," father William replied to his son, "I feared it might injure the brain; But, now that I'm perfectly sure I have none, Why, I do it again and again."</p>	<p>ウィリアムの息子のいうことによ 「父さんも年だなあ 髪もめっきり白くなった だのに年柄年中でんぐり返し それが似合う年なのかねえ」 爺さん即ち答えていわく 「脳味噌だいじと控えていたは かえすがえすも 若気のいたり 脳味噌ないと 分かったからにや やってやってやるだけさ」</p>
--	---

『不思議の国のアリス』ではいくつか宗教的・道徳的な詩のパロディが出てくる。しかし作者は1888年6月発行の*The Theatre*誌掲載の "The Stage and the Sprit of Reverence"で、聖書の言葉をパロディにすることに対して批判しているのは興味深い。

- (11) "photographer"としてのキャロルの評価については、GernsheimとTaylorを参照。
- (12) キャロルから9歳のGertrude de Chatawayの母への手紙。 "Would you kindly let me know what is the minimum amount of dress in which you are willing to have her taken?"と尋ねている("Lewis Carroll to Mrs J. Chataway" 28 June, 1876. Rpt. Wullschläger 21)。
- (13) ドジソンは日常生活で自分が「キャロル」として扱われることには激しい抵抗を感じていた。 "It is strange to me...that people will not understand that, when an author uses a "non-de-plume", his object is to avoid that personal publicity which they are always trying to thrust upon him." ("Lewis Carroll to Mrs S. Dodgson", 31 July 1890. Rpt. Wullschläger 57)
- (14) Uradimir Navkov (1899-1977) の*Lolita* (1955) の男性主人公
- (15) 子どもらしい遊びに熱中する子どもの姿を称える風潮が芸術に見られた。これと平行して「小さな大人」であった子ども労働者に関する社会制度も改良された。1833年の工場法は「子ども」を13歳以下と定義づけ、労働時間を一日8時間に制限した。19世紀の社会改革の多くは子どもに着目し、慈善団体のシャフツベリー協会や児童愛護協会など創設された。1870年には教育法案が制定され、義務教育がしかれた (Wullschläger 14)。
- (16) "Lewis Carroll to Mrs N. H. Stevens", June 1892. (Rpt. Wullschläger 21)

- (17) ラファエル前派については馬淵、Cars、そしてSternを参照した。  
(18) "Lewis Carroll to Gertrude Chataway" (Rpt. Wullschläger 40)

- 図版 1. *Alice's Adventures under Ground* (37)  
図版 2. "Alice Liddell in Beggar" (1858, Taylor 63)  
図版 3. "Beatrice Hatch by the Sea" Anne Lydia Bondによる彩色 (1873 Stoffel 40)。  
図版 4. "Evelyn Hatch Seated Nude" 彩色者不明 (1879 Stoffel 46)。

引用文献

- Carroll, Lewis. *Alice in Wonderland: Authoritative Texts of Alice's Adventures in Wonderland, through the Looking-Glass, and The Hunting of the Snark*. Ed. Donald J. Gray. New York : W.W. Norton, 1992.
- . *The Works of Lewis Carroll*. Ed. Roger Lancelyn Green, 1965.
- . "Photography Extraordinary" 『オドロキモノキ式写真機』高橋康成訳『ユリイカ：特集 ルイス・キャロル』 1992年4月号 東京：青土社、pp.42-45.
- . *Alice's Adventures in Wonderland & Through the Looking Glass: The Annotated Alice*. Martin Gardner Ed. London: Penguin, 1970.
- . *Alice's Adventures under Ground*. (復刻版) 東京：書籍情報社、2002年。
- Allison, Alexander W. Ed. *The Norton Anthology of Poetry 3<sup>rd</sup> Edition*. New York: Norton, 1983.
- Armstrong, Nancy. *Fiction in the Age of Photography*. Massachusetts: Harvard, 1999.
- Barber, Lynn. *The Heyday of Natural History, 1820-70* (1980). 『博物学の黄金時代』高山宏訳 東京：国書刊行会, 1995.
- Carpenter, Humphrey. *Secret Gardens: A Study of the Golden Age of Children's Literature*. London: Unwin & Hyman, 1985. 『秘密の花園：英米児童文学の黄金時代』定松正訳 こびあん書房、1988年。
- Cars, Laurence des. *The Pre-Raphaelites*. London: Thames & Hudson, 1999.
- Clerc, Christianne. "Le Vrai Visage d' Alice, in Visage d' Alice" 「素顔のアリス」星埜守之訳 『ユリイカ：特集 ルイス・キャロル』 1992年4月号 東京：青土社、pp.104-113.
- Cohen, Morton. *The Collected Letters of Lewis Carroll, Vols I and 2*. London, 1979.
- 藤田博史. 「少女愛のアヴァタール：サンス、ノン・サンス、ジュイーサンス」 『ユリイカ：特集 ルイス・キャロル』 1992年4月号 東京：青土社、pp.154-165.
- Gernsheim, Helmut. *Lewis Carroll: Photographer*. New York : Dover, 1969.
- Green, Roger Lancelyn. *The Diaries of Lewis Carroll, Vols I and 2*. Connecticut : Greenwood Press, 1971.
- Hancher, Michael. "Punch and Alice: Through Tenniel's Looking-Glass" in *The Tenniel Illustrations to the "Alice" Books*. 「『パンチ』と『アリス』：テニエルの鏡の国」石毛雅章 訳 『ユリイカ：特集 ルイス・キャロル』 1992年4月号 東京：青土社、pp.82-103.
- 笠井 勝子 監修 『不思議の国の"アリス"：ルイス・キャロルと二人のアリス』 東京：求龍堂グラフィックス、1991年。

- 小池 滋 編『ヴィクトリアンパンチ：図像資料で読む19世紀世界』東京：柏書房、1995年。
- 馬淵明子 編『世界美術大全集21：レアリズム』東京：小学館、1993年。
- 三宅 興子『もうひとつのイギリス児童文学史：「パンチ」誌とかかわった作家・画家を中心に』東京：翰林書房、2004年。
- Robson, Catherine. *Men in Wonderland : The Lost Girlhood of the Victorian Gentleman*. Princeton : Princeton UP, 2001.
- 佐藤 良明. 「いまどきのドリームチャイルド」『ユリイカ：特集 ルイス・キャロル』1992年4月号 東京：青土社, pp.139-147.
- Stern, Jeffrey. "Lewis Carroll the Pre-Raphaelite : "Painting in Coils", in *Lewis Carroll Observed*. 「ラファエル前派としてのルイス・キャロル：お絵かきでふらふら」高橋宣也 訳『ユリイカ：特集 ルイス・キャロル』1992年4月号 東京：青土社, pp.166-183.
- Stoffel, Stephanie Lovett. *Lewis Carroll in Wonderland : The Life and Times of Alice and Her Creator*. New York : Discovery, 1997.
- 高橋 康成 訳「オドロキモノモノキ式写真機」("Photography Extraordinary")『ユリイカ』1992年4月号 青土社)。
- Taylor, Roger and Edward Wakeling Eds. *Lewis Carroll : Photographer*. Princeton : Princeton UP, 2002.
- 富山 太佳夫『ダーウィンの世紀末』 東京：青土社 1995年。
- Wullschläger, Jackie. *Inventing Wonderland: The Lives of Lewis Carroll, Edward Lear, J.M. Barrie, Kenneth Graham and A.A. Milne*. London: Methuen, 2001.